
Regulus's Travels

リード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e g u l u s ' s T r a v e l s

【Nコード】

N 1 8 8 8 V

【作者名】

リード

【あらすじ】

死んだらレギュラス・ブラックになっていた子（記憶ほぼ皆無）が本人無自覚、無意識のうちに地味に原作改変&ブレイクをしている話。

* 注意 オリキャラが多数出ます。苦手な人はご注意ください。

1・Hogwarts Express（前書き）

作者のやらかした小説。

レギュラス、まじ不憫……幸せになって！！な感想を持ったから書きました。

オリキャラが多数出演する予定です。

これからも頑張ります！

1・Hogwarts Express

温かな陽光が輝く穏やかな日差しの中、黒い髪の兄弟が庭で遊んでいる。

兄である一人は幼いながらに整った顔をし、弟であるもう一人の子は少女と見まごうばかりの可愛らしい顔をしていた。微笑ましい普通の光景だろう。

兄弟の座り込んだ周りを光りの玉や様々な色に変わる炎がぐるぐると回っていなければの話だが…
そんな不思議な状況にあるにも拘らず、兄弟は遊んでいた。

小さい方の少年は、何も気にせずに幼い顔をして言った。

「…シリウス兄様」

兄である少年はその整った顔に笑みを浮かべ答えた。

「何だよ、レギュ」

小さな少年は口を開こうとした。

そこで、目が覚めた。

ガタン、ガタンと揺れる車内に目の前に居る銀髪の子供。
此処はブラック家本邸の自室ではないのだと、自覚する。

煩わしい純血貴族の扱いを避け、潜り込んだコンパートメントで寝てしまったらしい。

止まっていたはずの列車も動き始めている。

—— 早めについていたので、時間がたっていないのが救いだろ
うか。

変な所で自分は迂闊だとレギュラス・ブラックになった元少女は溜息をついた。

レギュラス・ブラックは転生者である。

具体的に言えば違うのかもしれないが自分は他の表現を知らない。

まあもつとも、レギュラス・ブラックが元少女とはいえ、

レギュラスの自我が芽生えきった後に自身が一度死んだ事を思い出したために、

レギュラスの人格構成にはなんら影響を与えていないのだ。

ほぼ覚えていないのだから転生者とも言えるのか果てしなく微妙だ。
だから彼は『前世は未来の東の島国の少女で若干記憶があります』
というのが正しい。

まあ、それはさておき、閑話休題。

九と四分の三番線は、素晴らしかった。

しかし、新入生には些かつまらない長い間の乗車である。

兄と一緒に乗らないかとコンパートメントを勧められたが、
友達を作りたいからとやんわり断ってみた。

兄は心配そうだったが自身も友達を車内で見つけた事を思いだした
のだろうか、

レギュラスの意見を尊重してくれた。

分かりにくい癖に、酷く優しい兄なのだ。

… 実家と折り合いが悪いのに自分の事を気遣ってくれる兄を、

弟であるレギュラスは兄本人が思うよりも兄を慕っている。

シリウス兄さん、ぼつりと言葉は流れ落ちた。

「ねエ」

どこかフランスの訛りのある英語で話しかけられる。

いつのまにか目の前の座席に座っていた美しい子供に自分が声をかけられている事に気付いた。

「貴方は、なーて、名前なの？」

まだ幼げなのにゾクリとするような美しい顔を持つ子供とは、このコンパートメントに入ってから初めて口を開いたんではなかるうか？そんな事を思いレギュラスは、

『——此処まで一緒に乗って来たのに、言って無かったっけ？』

思わず、家で無理やり教え込まれたフランス語で聞き返していた。それに銀髪の子供も驚いたような顔をして、フランス語で返した。

『貴方、私の言ってる事分かるの！？』

『フランス語って意味なら少しだけだ……。日常会話レベルなんだ。それと、僕の名前はレギュラス・ブラック。君は？フランスからの留学生さん』

『ジャンヌ・、ッ』

『ジャンヌ？』

着ているのが男子用の制服だったので思わず凝視した。
ジャンヌは女性名だ。

男の子の名前では可笑しい。

『違う、違う！ジャン・ルイ・デラクール！！』

銀髪の、いやジャンの必死な訂正が面白くてレギュラスは思わず笑った。

何だが友達になれそうだと思った。

自分を“ブラック”という区切りで見ない子は久しぶりだった。
初対面で友達になれるかもと思ったのは初めてともいってもいい。
その時点で大分に好感触だ。

その上、ジャンは可愛い。

光りに煌めくシルバーブロンドの髪にディープブルーの瞳。
笑顔が似合いそうな可愛い顔立ち。

（それをいうならレギュラスも女顔で可愛い顔立ちだが…）。

まるで、

「（女の子みたいだ・・・）」

と思ったレギュラスがいた事をここに記しておく。

似たような事をお互いに思っていたのは知らぬが花、というものだ。

1・Hogwarts Express (後書き)

ジャン・ルイ・デラクール (オリキャラその1)

四巻から出てきたフラー・デラクルの血の近い親族。
ヴィーラのハーフ。

2・Compartment（前書き）

捏造だらけ

下手すればオリキャラも主役はれます。

2・Compartment

私と同じコンパートメントの座席に座っている。女の子の様な綺麗な顔立ちを持つ少年。

レギュラス・ブラックは夜空のような黒の滑らかな髪に光の加減で銀にも見える銀灰色の瞳をしていた。
シルバークレイ

ぱつちりとしたアーモンド型の瞳はややつリ目がちのせいか猫の様な印象で。

見たことの無いくらい綺麗な銀灰色の瞳は、吸い寄せられるような輝きを放っていた。

私も母親がヴィーラだから標準以上に整った顔立ちをしているのに、彼は私達の美貌とは別の系統の美しさを誇る顔立ちだった。

男の子に美貌って言うのも果てしなく微妙だけど・・・。

私ことジャンヌ・ルイズ・デラクールとしては女心がちょっとアレだ。

目の前の彼ことレギュラス・ブラックに名乗った、

ジャン・ルイ・デラクールという名前は一族と関係者の上層部とで決めた名前だ。

何故偽名なのかについては一応、きちんとした理由がある。

私は母であるヴィーラの血を女に生まれたが故に濃く引いている。そのせいか、母譲りの傾国並みの美貌と魅了の魔法（呪い）が身に宿っている。

しかも、母譲りの美貌と言ったが母は中性的な美女だ。

私も兄とは違い中性的な顔立ちをしている。

…要するに母から受け継いでしまった魅力の魔法が男にもかかるが女の子にもかかる。

フランスの旧家で魔法を密かに習っているとはいえ、幼い年齢。

身の危険が大きいのだ。

母国フランスのボーバトン魔法アカデミーは男女比率が女子比率が異常に高い。

私は女の子を茨道に突き落とすのは避けたいし、男に押し倒されるのもまっぴら。

だから私は男女比率がほぼ均等なホグワーツに行く。

おばあ様がホグワーツの元生徒であったことも影響して、

イギリスのホグワーツに通う事が決定した。

先生方と監督生方にはもう話は通してある。

…私が思ってたよりもデラクルの家の名前は強いらしい。

しかし、ヴィーラの血を引く私がホグワーツに通う為にいくつか条件がつけられた。

その中の一つが自分で防衛が出来るようになるまでは男装をすることだ。

男だと自分の性別を偽っていれば、男のほうは男色趣味でもなければないかぎり

押し倒されたり暴行を加えられたりなんかしない。

女の子でも告白される事はあっても、貞操の危機は感じずに済むだろう。

現に兄も美しい顔立ちだが私よりも危険な目に会った回数は少ないというし。

そんな事情で私は男装をし、偽名をつけたのだ。

・・・偽名と言っても名前を女性名から男性名に変化させたただけだ
けど。

この中性的に整った顔は、女の子にも男にも見えるからその点では
助かっている。

さつきから話しているレギュラスはフランス語で話せるし、頭もい
い。

相当な教養を持ってるみたいだ。

流石、ブラック家の子供と言ったら、とても嫌そうな顔をした。
無表情だったけどなんとなくそんな気がした。

ガタン、ガタンとゆれるコンパートメント。

出てから少ししかたっていない為に、目的地までまだ遠い。

若干の沈黙が落ちかけた時、ドアを叩くノックの音が聞こえた。

それに、レギュラスが反応を示す。

ドアを開けるか否かの最終的な決定権はレギュラスにある。

最初にこのコンパートメントに居たのはレギュラスだからだ。

レギュラスは一拍置いた後、口を開いた。

「どうぞ・・・」

今は光の加減で灰色に見える瞳は至極つまらなそうに開くドアを見
つめていた。

2・Compartment（後書き）

これからも頑張ります。

あとジャン（本名ジャンヌですがジャンで統一します）はヴィーラのハーフなので、クォーターのフラァよりも美しく魅了の魔法が貌にかかっています（Fateのデイルムツドよりランクは下がりますがやっぱり人の身にはヤバい位の）。

主人公であるレギュラスは純血で魔力が大きく対魔力が大きい（ここが重要）のと旧家の名家故の英才教育で魅了を防いでます。

3・Weasley(前書き)

オリキャラその2登場。

次回はルシウスとかシリウスとか出したい。

3・Weasley

目の前に座っているジャンを見る。

ドアを見つめる深い青の目が、入れてやってと言っていて…。

見抜いてしまったジャンの心情、

旧家育ちで人の心を見抜くように躰けられた自分が嫌になった。
役に立つけど、気分は悪い。

人の意識や意思を僕は読み取るのが得意だ。

元空気が読める国の生まれだったのもそれに拍車をかけている。
幼い頃から教え込まれ、空気が察せられると手に取る様に人の機微
が分かる。

なまじブラック家とは違う家を知っているだけに、こういう行為は
苦手なのだ。

この家にはどうしても慣れない。
慣れてしまったら終わりだと思っけど。
自分を誤魔化すのにはもう慣れてしまった。

一拍の沈黙を分らない様にする為に口を開いた。

で、こうなった。

「ケイ・L・ウィーズリーだ」

黒に近い赤色、所謂^{いわゆる}クリムゾンレッドの髪に暗い色合いのハシバミ
色の瞳。

ちよつとすれた制服に僕らと同じにしては高い身長。
グリフィンドール常連のウィーズリーの家の子供がそこに居た。

「・・・レギュラスだ」

あえてファミリーネームを隠すと目の前のジャンやウィーズリーは怪訝そうな顔を一瞬見せたが、それを指摘してくる事は無かった。
・頭がいい奴は嫌いじゃない。
ブラックの名は、“純血”の貴族で有名だから。
初対面でしたら大体倦厭される。

——なぜか、ジャンには告げてしまったけど。

「ジャン・デラクールです。よおしく」

たどたどしく、ジャンがウィーズリーに手を伸ばした。
握手か、

ウィーズリーはジャンの英語の発言を馬鹿にせずその手を掴んだ。

「ああ、よろしくジャン。…あとジャン、レギュラスも俺はケイでいいよ」

兄貴と弟がいるんだ、とウィーズリーいやケイは告げた。

はにかむ顔は、カッコいい印象を与えていた顔を柔和に見せた。

それに、ジャンも顔を綻ばせる。

そして、二人は僕を見た。

自慢じゃないけど、僕は人より魔力が多く、その代償に若干顔色や体調が悪い。

“純血”や“半純血”の人間に時折出る先祖返り。なぜ起きるのかまだ判明していないが、先祖返りによって古の時代の魔法使い、そ

の莫大な魔力を身に宿している僕。

僕はまだ幼いせいもあるって魔力の大きさに体がついていってない。要するに一年の大半は体調不良。

それに病弱なために体力も必要最小限しかなく脆弱なのだ。

で、そんな僕は両親や親せき、純血の貴族の前でいい子、優秀なブラック家の息子という仮面をつけている。要するに性格を偽って表情を演技で賄っているのだ。

僕はそんな時ならともかく普段の私生活では僕は仏頂面気味の表情をしている。

それが、ケイやジャンには不機嫌そうに見えたんだろう。それに溜息をつく。

「…さつさと座りなよ」

言外に出ていかないでいいと告げる。

それに僕の目の前の二人はきょとりとした顔をした。

あ、ケイもジャンもそんな顔できるんだ。

「うん」

「ああ、レギュラスも宜しくな」

なんで、僕が……とも思っただけ

僕の手は僕の意味とは裏腹にしっかりとケイの手を握っていた。

「…まあ、よろしく頼むよ」

—— ケイ、君が僕がブラックだと知っても付き合っ気なら七年間。

それ以外なら組み分けまで、だけど

ケイと友人になったら、それはそれで面白そうだ。

別にケイの性格は嫌いじゃないし、ウィーズリーだからグリフィン
ドールだろうけど。

僕はまだ、子供なんだしそれくらい思ってもいいじゃないか。
ホグワーツではブラックの面目を汚さない程度に愉しむ気満々なん
だから。

—— できれば、未永く宜しく。

3・Weasley（後書き）

ケイ・L・ウィーズリー

アーサー・ウィーズリーの弟。ケイはアーサー王の円卓の騎士から。勇気や知恵はあるがグリフィンドール気質ではない。

深紅の髪にハシバミ色の瞳。カッコいい系の容姿。

アーサー・ウィーズリーは第一人、兄一人の三人兄弟だと聞いたので本来の弟のビリウスはアーサーの兄になってもらい弟ポジションにオリキヤラが入りました。

そして、レギュラスが入学した時には彼は卒業済み（^{アーサー}1952年以降の生まれとしか書いていなかったで1954年生まれルシウス・マルフォイよりも一歳年上にしてレギュラス達が来る前年に卒業ということにしました）

後、先祖返りで魔力や特殊能力をもつてのは結構な独自解釈。そのかわり多くの先祖返りの人間は体が成長しきるまで病弱（元から病弱では無い先祖返りの人間もいる。そして病弱なら体質は改善しない可能性の方が高い）。そして、先祖返りの子供は一族や家族にとって大切に扱われる。何故なら純血の、というよりも魔法族の数はマグルよりも少ないから。普通の魔法族の子供も宝でとても大切にするので、魔力や特殊能力を持つが故に病弱な先祖返りの人間は魔法社会で殊更大切に扱われる。リドルにパーセルマウスや莫大な魔力、センスが受け継がれたのは血筋による自身のものと偶発的に起こった血筋の先祖返りだと私は考えています。

次回も頑張ります！

4・Union division(前書き)

シリウス視点。

4・Union division

一年生たちが大広間に入ってきた。

小さな体を緊張でかちこちに行っている新入生が殆どで微笑ましい気分になる。

しかし例外というか特殊な奴らも少なからずいるもので、それは異様に目についた。

悲しいかな、一番目立っているのは俺の弟のレギュラスを筆頭の三人組だった。

三人組はマイペースに何事か話している。レギュは作り笑いを顔にはりつけていた。

それを残り二人が気持ち悪そうに見ている。ああ、レギュのほぼ完璧な作り笑い（両親親戚貴族その他諸々をごまかせる。今までは俺とクリーチャーしか気付いていなかった）を見抜いているらしい。

それに感心と安心をした。

どうやら俺の弟は七年間のホグワーツ生活で苦楽を共にできるかもしれない友人候補を見つけて、側に居たい（自覚があるのかは分からないが）と思っているらしい。

当たり前の談笑。

それが緊張でざわめく新入生の中で際立って目立つ。

「（流されにくいのはいいことだと思っが……）」

いや、俺ん時も目立ってたから、文句というか苦言は言いにくいのだが…。

レギュは目立つのがあんまり得意じゃないのに、と思った。

父も母も気づいてなかったがレギュはあまり社交的な人間じゃない。むしろ、非社交的な人間だ。

人の機微をほぼ見抜き、自分に有利というか有益にコントロールできるのだ。

親の期待するような将来の為の人間関係を築くのは得意だが好きではないそうだ。

そもそも本質が研究家気質だからか、自分の調子を乱されるのが大嫌いなのだ。

だから、どう転んでもグリフィンドールには来ないだろうなと思う。

断言できる。

両親も俺じゃ無くレギュに期待してるからな…。

あいつは期待を裏切れないタイプだ。

スリザリンに入ってくれなんて言われたらスリザリンを選ぶだろう。(あんなもの、頼みごとのようにいうがただの命令でしかないのに)。

しかし本人の意思に関係なく、あいつは寮を決める。無言で手を離す。

俺も三日前に告げられた。

もつとも「僕がスリザリン以外の寮に入ったら“ブラック”は堕ちたと言われます」。

そんな遠まわしな言い方だったけど、あの時、あいつは諦めたのだ。自分で寮を決めるチャンス。

“ブラック”と“あいつら”の面子を守る為に。自らの手で投げ捨てた。

昔から、どうしようもなく甘くて優しい弟。

その膨大な魔力のせいで病弱で虚弱体質で、誰よりも家族を求めた。俺もあいつの前だけならただの兄でいられた。

そんな弟に重荷を背負わせた。

俺がグリフィンドールに入ったせいで全てを押し付けた形になった。それなのに、俺を見る目は昔のままです。

どうしようもなく、変わらない。

思わずため息をついた。

それにしても、目立っている。

三人ともタイプの違った整った容姿をしてるからというのも理由の一つかもしれない。

しかし、不躰な視線が一番多いのが三人組の中の一人のレギュだ。

兄である俺がグリフィンドールに入ってから、お前もか？と、不穏な視線をぶつけられているし、逆に純血連中からは熱い視線が向けられている。

それに、その歳にしては背の高い赤毛はウィーズリーの家の出である子供は

何故ブラック本家の人間と、といった視線を向けられている。

銀髪は恐ろしく整った容姿のせいで（エルフやウィーラ恐らく魔性の血が入っているんだろう。魅了の魔法の魔力のようなものが銀髪の周囲を漂っている）熱い視線を向けられている。

異様な周囲の様子に目眩がした。

本人たちもそれを理解しているのか三人でまとまっている。

誰か一人でも離れたら集中砲火を喰らうと理解しているからだ。

というか、自由に動けたら俺も聞きに行きたい。
何がどうしてお前らそうなったんだ、と。

ざわつく大広間をマクゴナガルの声がぴしゃりと打つ。
シーンと静寂が大広間に落ちた。

「——では、これより組み分けを始めます」

組み分けの儀式が始まった。

5・Slytherin(前書き)

組み分けの話。

兄弟の複雑さとか・・・。

5・Slytherin

アルファベットのAから順に組み分けが進んでいく。

俺とレギュラスとジャンはそれをただ黙って聞いていた。騒ぐほどのものではない。

ただ、帽子をかぶるだけだ。

マクゴナガル女史のきびきびとした声が大広間にこだました。組み分け帽子は大きな声で組を告げる。

その度に巻き起こる歓声と拍手。

「ブラック・アークタルス・レギュラス！」

その名前に水を打ったように大広間が静まり返った。

その声にレギュラスが動く。

ああ、ブラックならBだよな。

そんな事を俺はふと思った。

レギュラスは灰の瞳を瞬かせ、俺らに向かって軽く告げる。

「じゃあ、お先に」

レギュラスがすつと歩を進めると誰もが自然に道を開けた。

凜と伸ばした背筋の美しさに自然と目を奪われる。

黒のローブを翻すと、こつりと大広間に足音を響かせた。

そこにいたのは礼儀作法を生まれたころから叩き込まれたのか、生まれ持ったものなのかは分からない、

洗練された身のこなしをする、一人の魔法使いの姿。

こちらを注目していた上級生が、思わずほうと感嘆のため息を漏らす。

まるでお伽噺のなかの王子のような美しく、それでいて高貴さを感じさせる。

椅子に腰かけ、時を待つ。

被せられた帽子は何拍か置いて叫んだ。

「スリザリン！！」

爆発的な歓声のスリザリンの席から巻き起こった。

レギュラスは帽子を女史に手渡すと、じっとグリフィンドールの席を見つめた。

そこにいたのはシリウス・ブラック。

レギュラスの兄だった。

静かな沈黙が落ちる。

皆、ただ黙って見つめ合う兄弟の姿に気付いたから。

レギュラスは、ただ黙って僅かに目礼した。

彼の兄は何も返さない。

それを見たレギュラスはくるりと踵を返す。

そして、立ち上がって待っていた監督生のバッジの上級生に席に案内された。

案内したのは、ナルシッサ・ブラックの婚約者のルシウス・マルフォイ。

ブラック家の力を利用されないためなのかブラック家の親戚で周りを固められていた。

従姉とその婚約者にはさまれ、向かい側には遠戚だろうスリザリン生が座っている。

声は続く。

だんだんと読み上げられていく名前。

「デラクール・ルイ・ジャン！」

次はジャンだった。

「いてきいまーす」

にっと笑って帽子をかぶる。

レギュラスとは違う意味で視線が集まっていた。

——主に容姿的な意味で。

天使みたいな顔をしているから無理もない。

純銀みたいな銀色の髪に、海の色みたいなディープブルーの瞳。

中性的で小柄なのも相まって女の子みたいだった。

殆どの子達がぼうっとジャンの事を見つめている。

列車の中でヴィーラの血が入っていると聞いたからそれが原因の一つだろう。

「スリザリン！」

ジャンもスリザリンに決まった。

ぱあっと笑顔になって、席に座る。

レギュラスも若干嬉しそうな顔をした。

純粹にいいな、と思う。

レギュラスがブラックでも俺は友達になってみたいと思ったから。

スリザリンになれたジャンが羨ましい。

スリザリンもいい寮だと思うのだが……。

母さん以外は皆、嫌がるだろうなと思う。

兄貴は根っからのグリフィンドール生だった。

それでスリザリンなんていうけど、スリザリンの狡猾ってのは知恵とか決断力とか無いと駄目なんじゃないかと思う。それにスリザリンは真の友を得るともいわれている。それに矜持が高いから努力を隠すだけで、努力家の人間は多く、寮内での団結は凄いだろうと俺は睨んでいる。

グリフィンドールは、俺は苦手だ。

騒がしいし煩わしい。

秘めたいことにも首を突っ込む人間が多すぎるのだ。

勇猛果敢な騎士道とか抜かす癖に、何かあつたらスリザリンをまず疑う。

そもそも、碌な話もせずに毛嫌いする訳が分からない。

むしろ、逆に凄い。

グリフィンドールは勇猛果敢というけれど、

そんなの一種の猪突猛進なだけではないかと俺は思うのだ。

——それからしばらくたつても俺の名前は呼ばれない。

まあウィーズリーはWだからしょうがないんだけど。

だんだんと減っていく人間を見ながら俺はため息をついた。

ようやく呼ばれた。

「ウィーズリー・ランスロット・ケイ！」

帽子がかぶせられる。

聞いたことの無い男の声が頭に響いた。

『おや、ウィーズリーの家の子だね？』

『ああ。そうだ』

内心、当たり前前の事を聞くな！と思った。
表には出さなかったけど。

『君の家は代々グリフィンドールだが、・・・君は母親の血が濃い
様だ。それならば、』

俺の母の名前はセドレーラ・ブラック・ウィーズリー。
となると、俺は・・・！

「スリザリン！」

ウィーズリーの子供がスリザリンに入っただのに驚いたのか。
グリフィンドールの奴らもスリザリンの奴らもポカンとした表情だ
った。

歓声や拍手も上がらないまま、俺は席に着こうとした。

すると、小さいが列記とした拍手がスリザリンの席から上がる。
レギュラスとジャンが拍手で俺を歓迎した。
それに正気が戻ったのか、スリザリンでも拍手が起こる。

まあ、俺も純血だし、母さんスリザリンだったし。
そんな事を考えながら席に腰を降ろす。
にやりと笑ったレギュラスと目があつた。
こちらにも、にやっと笑い返す。

まあ、これからも宜しく。

5・Slytherin（後書き）

あと、アーサー・ウィーズリーの母親はがちでブラック家です。
ういき先生のシリウスのページで確認できます。

これからも宜しくお願いします！

6・Exposure（前書き）

スリザリン寮にて、暴露

6・Exposure

地下に移動して、動く肖像画タスベトリの前に立つ。

どこか暗い色彩の絵はルシウスに合言葉を尋ねた。

「純血!!」

監督生のルシウスがそう唱えると寮への扉が開く。

僕ら一年生はひと塊りになって寮内へと足を踏み入れた。

「すつげえな・・・」

「すごいっい」

横で、ジャンとケイの二人が感嘆の声を上げている。

たかが地下室の側の寮と侮るなかれ。

スリザリン寮は前世比較してみるとでもないくらい豪華だった。実家よりは豪華で無いけど、学生にはもったいない位豪華である。

しかも、魔法が掛けられているのか空気は清浄だし、暖かい、程良い明るさもある。

もしかしたら、寮の中で一番豪華で過ごしやすい寮かもしれない。内心、そう思った。

「女子生徒は左の階段を降りなさい、男子生徒は右の階段へ」

きびきびとした声をあげるのは、シシー姉様。

主席なのも相まって、ルシウスの手伝いをしてるみたいだ。

相変わらず綺麗な人。明りに明るめの金髪がキラキラと光っている。

「ブラック、ウィーズリー、デラクールはこちらへ」

ルシウスに呼ばれた。

まあ、無理もない。

一応三人とも恐ろしく名家だ。

ケイの生家のウィーズリーは血を裏切るものと呼ばれるものを多く排出するけど、

グリフィンドールを多く、スリザリンも輩出する名家だし、

デラクールは現当主がヴィーラを嫁にしたとはいえ古い家柄の貴族なので問題なし。

そして、僕の家、ブラック家はイギリス魔法界の王家とも言われる家柄だ。

厄介事が多いことは否めない。

「なんでだ？」

「ど、して？」

「ともかくにも、速く移動した方がいい」

ここじゃ、移動する他の子に迷惑だ。

そう言葉を投げかけて疑問視を飛ばしている二人を連れて、ルシウスが使っている監督生用の一人部屋に足を踏み入れた。

踏んだ絨毯は上質に整えられていて、その他の調度も暗めだがセンスはいい。

——暗いのもスリザリン気質なのかもしれないし、実家こんな

のだし。

古い家柄と言うものは総じてほぼ貴族趣味なのだ。

ルシウスが入ってくると同時に扉が閉められる。

お前はいつ来たんだよ。

ケイがぼそつと呟いたのを聞いて、思わず脇腹を小突いた。

いいから、黙ってる。

ど、したの？

ジャン、今はちょっと黙っておいてくれ。

「で、僕らになんのようだ、ルシウス」

命令口調なのは気にしないで欲しい。

実質僕の実家がイギリスの魔法界のトップの家系でヨーロッパでも三指入る名家なので、

コレぐらいしないと実家に怒られるのだ。みつともないと。

シリウス兄さんと同じ灰色の目を細めながら尋ねる。

ブラック家は顔がいいのでこんな表情は酷く冷たく見えるのだ。

「若様を呼びだすのは私としても避けたかったですけど・・・」

「口上はいいから、早く本題を言って」

それと若様はよせ。

その言葉は口内へ消えた。

兄が順当にいけば継ぐはずだったブラック家次期当主の名は何の因果か僕の名になった。

僕がそう呼ぶのを止めると言っただって、ルシウスは止めないだろう。兄がブラックとして異質なグリフィンドールに入った時点で兄が当主になる事は無いんだから。

ジャンやケイが僕を驚いたように見ているのが分かる。どうせ、僕の事を二重人格の様に思っているんだろう。兄さんにも始めてみせた時にとても驚かれたから。慣れてると言えば慣れてるんだけど。

「では、単刀直入に言いましょう」

「そうしてくれ」

「そこにいるデラクール家の子供。お嬢さんです^{レディ}」

「はぁ!!?」

ぎょつとして大きな声を上げたのはケイ。

無理もないと思う。

一番この中で貴族や古い家柄としての場数を踏んでなさそうだし。驚いてもなにも驚かない。

「え、何で」

動揺したのが、ジャン。いや、ジャン又だろう。

コンパートメントでいい違えたのが本名だったみたいだ。

ディープブルーの瞳が不安げに揺れている。

「僕らにばらしたってことは、僕ら三人は同室なんだね・・・」

僕は平然とルシウスに確認のために声をかけた。

コレくらい、表に出さないのは得意。

日本人ってあまり感情を表に出さないよね。

「ええ」

「わかった。じゃあ、部屋に案内してくれ」

固まっている二人を尻目に、ルシウスと話を進める。
完璧に二人は置き去りだ。

「ちょ、ちょっと待て！！何で、女の子と同室なんだ！？」

「何でって、性別を隠すようだからでしょう」

それが何か、と真顔で畳みかけるとケイは黙り込んだ。

「れ、レギュラス」

「ジャン。いいえ、ジャンヌでしたね。女性の名前を間違えるとは……もうしわけありません」

「それは、いいーの！！な、で驚かないの！？」

その言葉に思わず首をかしげた。

「驚いて欲しかったんですか？」

「ツ……！！！？」

絶句した。

「じゃあ、黙らせたし移動しますね。ルシウス」

「わかりました。・・・相変わらずですね、若様」

その言葉には僅かな微笑みで答えて、部屋へ案内させた。

「あ、ジャンヌ。あとで、本名教えてくださいね」

「あ、それは俺も」

「!!!!!!?」

以外とケイが図太かったのが判明した。

6・Exposure（後書き）

監督生は知っている、事実。

そして、一番図太いのはレギュラスだけどケイも恐ろしく図太く立ち直りが早い。

次回も頑張ります！

7・Astonishment(前書き)

別名ケイさんの災難

7・Astonishment

とんだ日から一夜明けて、朝日は昇って来た。

どんな奇想天外なことでも次の日はやってくるんだなあと俺はようやく実感した。

例えば、コンパートメントで一緒だった二人がとんでもなかったりしても。

一人は名門中の名門の次期当主だったし、一人はフランスの名家の娘だった。

しつかり、本当の名前も教わった。

ジャンヌ・ルイズ・デラクールというらしい。

性別を偽っていた理由も後に交わした会話の中で判明した。

俺が親でもきつとそうするよ。

だって、こいつまずいくらいいかいし。

危ないよな。

レギュラスも名門じゃなくて普通の家生まれだったらヤバかっただろう。

そうからかったら、思いきりぶん殴られた。

「誰が、女顔だ」

銀灰の瞳は座り、冷たく光っていた。

こいつに、女顔とかその他諸々は禁句らしい。

確かに色が白くて下手な女より華奢でこんなに容貌も整っていたら、本人のプライドはあれだろうし、結婚できるのかも謎だ。

素直に謝っておいた。

男として不憫だ、こいつ。

そう俺に思わせた奴は、すやすやとベットでまどろんでいる。
寝ている顔は造形が恐ろしく整っているのも相まって、正直女にしか見えない。

けぶるような睫毛は長く、黒の髪は滑らかで、唇は濡れたようにつやつやと輝き、頬はうつすらと薔薇色に染まっている。顔だって整ったパーツがバランスよく顔に収まっている。

細い事も相まって全体的にか細い印象を与えるが、それが加護欲をそそられるように見えるらしい。

起きている時はともかく寝ているような状況では完璧に女にしか見えない。

・・・好事家が好んで寝台に侍らせそうな少年だ。

知らなかつたら女の子だと勘違いしそудなと反対側を向けば、絶世の美少女が寝ていた。

振り向いた事を後悔した。色々ありすぎて忘れてた。

俺、こいつらのファンにいつか殺されんじゃね、思わず思えた。

丹念に手入れされているであろうシルバーブロンドの髪、けぶるような睫毛、薔薇色の頬、薄桃色にほんのりと色付く小さい唇、毛布から飛び出ている手首は折れそうなくらい小さい。

レギュラスと同じくらい小さな体。

・・・細身のなりをしているのでお姉さま方に人気がありそуд。

二人とも男にも人気がありそудと言ったら、レギュラスは泣きそうな顔をした。

男なのに男に人気。冷静に考えたら、言った俺が全面的に悪かった。全力で謝った。

謝るのはいいから、連れ込まれそудになったら助けてくれと頼まれた。

今までにも何度か連れ込まれかけ、その度に兄や両親、親戚の女性に助けられたらしい。

今度は俺が泣きそうになった。

レギュラスが不憫すぎる。そして哀れすぎる。

ジャンも同感なのかうんうんと頷いてる。

二人に全力で謝り、守ると約束した。

なんだ、この不憫ーズ。

淡々と話す事実には俺のが泣きそうになるっておかしいだろ。

自覚がないのがまた不憫。

こいつらの兄貴も大変だったんだろうなと推測した。

本人達が無意識の事実だ。

まだ早い時間だが溜息をついて起き上がる。

ギシリとベットのスプリングが軋んだ。

俺の両脇のベットには天使の様な寝顔の二人がいる。

俺も結構整った顔をしているけど、こいつらほどじゃない（男顔だし）。

正直、俺や名家の連中並みに耐性が無いとレギュラスもジャン（ジャンヌだが俺らはあいつが全校にばらす日までこう呼ぶことにした）も目に毒だ。

なんで、同室なんだと神様でもいいからこのさい誰かに尋ねたい。なぜ、こうなった。

7・Astonishment（後書き）

自覚がない人ほど周りに迷惑がかかるって話。

ケイくんは意外とツッコミ派。

他の二人は天然ボケ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1888v/>

Regulus's Travels

2011年10月10日10時09分発行